

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

昭62-49838

⑬ Int. Cl.

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 昭和62年(1987)3月4日

A 61 B 10/00

1 0 3

E-7033-4C

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

⑮ 発明の名称 生検用鉗子

⑯ 特 願 昭61-128277

⑰ 出 願 昭61(1966)6月4日

優先権主張 ⑱ 1985年6月4日 ⑲ フランス(FR) ⑳ 8505386

⑳ 発 明 者 ジヤン-マリー シン フランス国 パリ 75116 アブニユー ビクトル ウゴ
トゲン 45

㉑ 発 明 者 ブルン ゼタン フランス国 パリ 75655 リュ デュバンダン 23

㉒ 出 願 人 ジヤン-マリー シン フランス国 パリ 75116 アブニユー ビクトル ウゴ
トゲン 45

㉓ 出 願 人 ブルン ゼタン フランス国 パリ 75655 リュ デュバンダン 23

㉔ 代 理 人 弁理士 関根 秀太

図 表 記 号

3. 発明の詳細な説明

1. 発明の名称

生検用鉗子

2. 特許請求の範囲

- (1) シースの一端でリンクロッドに各々連結されたスプーン又はあご部材2個から成り、該リンクロッドはシース内を挿通するワイヤと一体を成すように連結しており、シースの反対端に位置する把柄のコントロールをうけ、あご部材の間に針が位置する生検用鉗子において、該コントロール リンクロッド(9,10)が針(5)に連結し、あご部材(3,4)がその上を針(5)の長手穴(8)が通る固定軸(7)に連結することを特徴とする生検用鉗子。
- (2) 針(5)に横方向切欠部(12)が設けられたことを特徴とする特許請求の範囲第1項に記載の生検用鉗子。

本発明は、シースの一端でリンクロッドに各々関節状に接合されたスプーン又はあご部材から成る生検用鉗子に係わるものであり、該リンクロッドはシース内を挿通するワイヤと一体を成しており、シースの他端に位置する把柄によりコントロールされる。

針はスプーン又はあご部材の間に位置する。

公知の生検用鉗子においては、生検標本の採取部位を決めるために用いる針は二個のあご部材の間に固定されており、生検で「組織になる」場所を占めることになる。

更に公知の生検用鉗子はあご部材がお互いに直なるように連結し、各あご部材の切開端に向向している端部はリンクロッドと接合している。二個のリンクロッドはシースの各端部でメインロッドと接合し、シース内を挿通するコントロールワイヤに固定されている。この種の公知装置は、二つのあご部材と、メインロッドとは一点だけで接合しているリンクロッドとが形成す

特開昭62-49838(2)

る並行四辺形が支点を中心にしてのみ傾くことが出来て生検の精度、効率といった点で欠陥があった。更に、極く小さい部材を組立てるので、細かい手作業を必要とした。

本発明による鉗子は、簡単な構造を有し、鉗子を閉めていても針が引き出し可能であるので、前述した公知の鉗子の欠点を取り除くことができる。あご部材は鉗子を閉閉している際には揺動できない。

上記目的を達成するために、本発明による生検用鉗子は下記の主要な特徴を有する。即ち、リンクロッドは針と連結しており、あご部材は針の長手方向穴が動く固定軸に連結されている。

鉗子を閉じた時に粘膜内への針の進入を容易にするために、本発明は鉗子に横方向の切り欠き部を設けることを配慮した。

本発明の理解の一助とするため、本発明鉗子の一実施例による切開端を示す部材の断面を参照しながら以下に詳細な説明を述べる。

生検用鉗子は、シース(1)一組、シース1内

を貫通し、切開端部に対峙する(図面の通り)断面に位置するハンドル(図示せず)によるコントロールをうけるワイヤ(2)から成る。シース1内を通過し、ハンドルによりコントロールをうけるワイヤ(2)は、スプーン又はあご部材(3,4)を互いに旋回させる。スプーン又はあご部材(3,4)は各々四みぞ部(3',4')を有する。鉗子を閉じると、これらの四みぞ部(3',4')により生検の量が決定される。針(5)を用いて生検標本採取の原にあご部材を固定する。

上記の本発明実施例によると、ワイヤ(2)はシース(1)に固着したスリーブ(6)内に位置する針(5)の基部に一体となって固定される。

あご部材(3,4)は、その長さの中央附近でスリーブ(6)と一体であるリベット(7)に接合し、その上を針(5)の長手方向穴(8)が移動する。四みぞ部(2',4')の反対側ではあご部材(3,4)各々リンクロッド(9,10)に接合されている。リンクロッド(9,10)は、あご部材(3,4)の反対側で針(5)に固着したリベットから成る片

動軸(11)に接合する。

ワイヤ(2)をすべらせると、針(5)と一体軸(11)とを引張ることになる。あご部材(3,4)は開口不(8)が通っている固定軸(7)のまわりを旋回する。ワイヤ(2)を牽引することにより、あご部材(3,4)から成る鉗子が回り、針(5)は四みぞ部(3',4')が形成するスペース内に殆ど完全に入ってしまう。この状態では、生検量は最大となる。

2ヶ所(1,11)で密閉されるあご部材(3,4)は、公知の生検用鉗子と違ってワイヤ(2)の軸のまわりを回転することはない。

前述の鉗子の組立は、公知の鉗子とくらべて容易であり且つ時間がかからない。更に公知の針つゝ生検用鉗子と比較すると本発明による鉗子では、針と主要ロッドとが一体化されており、部品の数が一つ少なくなる。このため、組立、固定化、切開作業が容易される。従って、本発明による生検用鉗子は公知の鉗子とくらべて廉価である。

本発明の好ましい実施例によれば、本発明は針に横方向切欠部(12)を設けたことに特徴した。針(5)を引っ込めると、あご部材(3,4)が閉まり、あご部材の切開端部は粘膜内に進入して生検標本を採取、切欠部(12)は針(5)が粘膜外へ出るのを妨げる。これにより鉗子の粘膜内への進入が容易になり特に粘膜の抵抗が強い時には、生検採取を容易にする。

4. 図面の簡単な説明

第一図は、本発明による生検用鉗子の一実施例を示す。

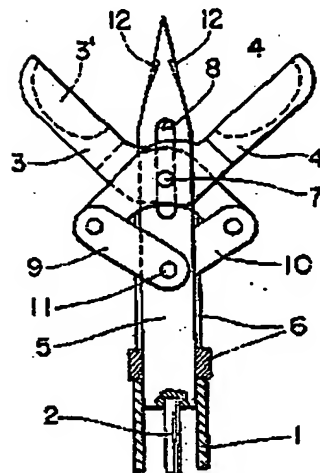
図中 1 --- シース 2 --- ワイヤ
3, 4 --- スプーン、あご部材
3', 4' --- 四みぞ部

特開昭62-43838(3)

図面の浄書(内容に変更なし)

- 5...針 6...スリーブ
7...リベット 8...開口部
9, 10...リンクロッド
11...共通軸 12...切欠部

特許出願代理人 弁護士 関根 秀太



手続補正書(方式)

昭和61年9月18日

特許庁長官 殿

1. 事件の表示 昭和61年特許願第128277号

2. 発明の名称 生検用器具

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

名称 ファン・マラー シントゲン(他一名)

4. 代理人

住所 107 東京都港区北青山(丁)2番3号

青山ビル410 電話 403-5281

氏名 (特許) 弁護士 関根 秀太

5. 補正命令の日付

請求日 昭和61年8月6日

熟成日 昭和61年8月23日

6. 補正により増加する発明の数 0

7. 補正の対象

- (1) 代差を証する写真
(2) 適正な図面

8. 補正の内容

図面の通り

9. 添付書類

- (1) 委任状及び同意文
(2) 図面

51冊

126



-225-

THIS PAGE BLANK (USPTO)